湖月抄

りみちかの

823
M8 K4

7152

紅葉賀

巻名ハ詞をとりて号す也但此巻に紅葉賀と注しきこゆる詞ハなしと侍る歟試楽の日かくつくし給ふハ紅葉のかげやおそろしく云々とあり又花宴巻にも御紅葉の賀とあり又若菜の下に世の御事にハ朱雀院の紅葉賀まいりのよの事思ひ出させ給ひてとかくあはせて巻の名とせり昔のくだりしろし物語に神泉苑に紅葉の賀ハさこうしめさくらふことあり又藤井の女よ若菜の巻乃賀ハしたまふことあり又竜の賀をしみ事あり義和の比時紅梅の賀とこれありける事ありこれらの名目と例とせらるゝや　花孟の有

細　賀とハ千年の満させを賀して祝末の寛算をいはふ天皇の御賀ハ仁明天皇嘉祥二年三月興福寺大法師等奉賀天皇満四十これをしめなり太上天皇の御賀ハ淳和天皇天長二年十一月奉賀太上天皇五八之御齢也是始也此巻ハ源氏十七歳の十月より十八歳の七月までのことあり河内本十月とよしとなへてもり花鳥に十月を用ひのも如何　愚意記之

朱雀院の行幸ハ神無月の十日あまりなりよのつねならずおもしろかるべきたびの事なりければ御かた〴〵物見給はぬ事をくちおしがり給ふうへも藤つぼのみ給はざらんをあかずおぼさるれば試楽を御前にてせさせ給ふ源氏の中将ハ青海波をぞまひ給ひけるかたてにハ大殿の頭中将かたちよういハ人にことなるを立ならびてハ猶花のかたはらの深山木なり入かたの日かげさやかにさしたるに楽の声まさり物のおもしろきほどにおなじ舞の足ぶみおもゝち世にみえぬさまなり詠などし給へるハ

孟　顔持之

朱雀院の行幸　花　此行幸ハ宇多御門の御賀なりとみえたりあるべしとなり延喜十六年三月七日朱雀院に行幸有法皇五十賀云々醍醐の御門の比代に朱雀院と申ハ寛平法皇の御事也彼五十御賀ハ三月の事なりしとは紅葉院に十月紅葉の比に出座まして此院に一院と申事也是則寛平法皇にあたれりらつくし桐壺の御在位の間に一院崩御の事みえざれ寛平法皇ハ延喜御門崩御て後かくれさせ給ふ此院賀のすゑみられん五十賀とも定べからさるにて院の出家とあるべし　細　花鳥に注御法あり宇多御門御賀ハ三ケ度也朱雀院の事多く注せらる古今に朱雀院の女郎花合とあるも宇多院也此行幸の事河海に康保二年十月とひかう是によ

とうくゐ　河云康保二年十月廿三日ニ行幸。詩題飛葉舟軽とそ

行幸　細　蔡邕云天子車駕所至見令長三老官屬親臨軒作樂。賜以食帛民爵有級或賜田租故謂之幸　晋灼曰民臣被其德以為徼倖也。又顔師古云幸者可慶幸也故福喜之事皆称為幸ト

試楽と御前にてせさせ給　河　御かへの試楽也　花　御かへにハ試楽調楽などいひて前日の試楽を見るとも

ゑぶ付の試楽内裏にてせさせ給ふ　右大臣の女御ゆるさせ給はぬとてまいらせ給

源氏の中将ハせいかいはをぞまひ給ける　河　南宮譜云此曲、承和御時大納言良峯安世朝臣奉テ勅命ニ作此舞ヲ時依勅改盤渉調但詠ハ小野篁朝臣作ル　詠とハ舞の中にうたふ事也

詠ニ曰　桂殿迎初歳　桐楼早ニ媚年　剪花梅樹下　蝶燕畫梁邊

舞装束　青色袍表袴ニ文小葵　蒲萄染下襲　面大海賦裏蒲萄　大海賦半臂也

かたてにハ大殿の頭中将　細　舞のあひて也　公以中将もまことにきよけなれと立ならひてハ

花のかたはらの深山木也

花のかたはらのみ山木　細　このこゝろハいかんとなれハ常盤木も人不捨（こきまます）さこそ　花ニ比の月九云花のかたはらの常盤木のやうにみゆるとこそ　仲忠大将と見えし事をハ仁寿殿女御の宮と常盤木によそへてよめる事あり

詠なとし給へる　細　青海波の詠ハ河海ニくハしく前ニ注ス

迦陵頻　細　翻譯此云妙聲

鳥　大論云在ニ殻中ニ未出発声

邑微妙勝余鳥　正法念經

出ニ妙音声ヲ　若天若人

緊那羅等無能及者唯除ク

如来音聲ヲ向　聖主天中

天迦陵頻伽聲　法華經

大論云迦陵頻伽鳥此鳥鳴時音中ニ

嘽苦空無我常楽我浄也

和鈔　かれうびんかとハ名

くうのこの中にありながら声のいづれの鳥よりもまさり

すぐれたる声とそれの説

法の声にきこゆ

春宮の女御かくめでたきにつけてもたゞならずおぼして

細　こうきでんの女御也　孟女ハ源氏のうつくしくおはしますをねたみて

けやうの女御なとも容顔奏

[illegible]

ようれりしとのあやうく

神などそらにめでつ　細　河海

天狗などいふ物ハ　河　大鏡云

[illegible]

おの延喜大井の行幸に冨小路御息所の御服の歌

雅明七眾

[illegible]

是や佛の御迦陵頻伽のこゑならんときこゆ

おもしろく哀なるにみかど涙をのごひ給ひ

上達部みこたちもみなゝき給ぬ　ゑいはてゝ

袖うちなをし給へるにまちとりたるがくの　師傳のおもてをかけてとりて

にぎはゝしきにかほの色あひまさりて　細　の曲よりかくていかにまさりて

つねよりもひかるとみえ給ふ　春宮の女

御かくめでたきにつけてもたゞならず

おぼして神などそらにめでつべき

かたちかなうたてゆゝしとのたまふを女房

などハ心うしとみゝとゞめけり　細　孟容通ずる

心のなからましかバましてめでたくみえまし

とおぼすに夢の心ちなんし給ひける　宮

ハやがて御とのゐなりけり　細　文のあつかし

今日の試楽ハ青海波に事みなつきぬ

ないかゞ見給つると聞え給へば　細　御むかひの思

あいなう御いらへきこえにくゝて　細　勅定也

ことに侍つとばかり聞え給ふ　細　勅定之孟

とうすりくさか[illegible]のこし
とりて書[illegible] 細 弘徽殿
の女御[illegible]は今源といふ
[illegible]おぼしき[illegible]なりけり
ともれりしの[illegible]
こよなくてくろり 孟 通下
みな[illegible]ぞくなるよ[illegible]
答すくく
成のこ八ゝとぞら 河 良家ノ
みせ若紫[illegible]朱
雀院の乃筆わたし[illegible]
人[illegible]
[illegible] 宋花物語[illegible]
東三条院の[illegible]
家のまゝ乃[illegible]
細 堂上の人[illegible]至徳記云
良家[illegible]下上臈
[illegible]也
細 源の[illegible]
[illegible]

[illegible]ゝしうおしれてこそしられ侍れ[illegible]
てづゝ[illegible]家のこゝろ[illegible]
名をえ[illegible]の師の[illegible]
りしこそれど[illegible]
とえ[illegible]の日[illegible]
[illegible]
[illegible]中将の[illegible]
[illegible]
源 ものがたり[illegible]
[illegible]

[illegible]
細 楽府八唐の楽と
[illegible]

め[illegible]かゝりしかば[illegible]
よこのひ[illegible]ぞやありきん
[illegible]の神わた[illegible]ともぞ思へと[illegible]
つゆく[illegible]とわ[illegible]
[illegible]
[illegible]のつ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]ねども[illegible]
[illegible]

細 唐とぞ[illegible]
孟 朱雀院[illegible]
河 唐八[illegible]
細 [illegible]孟[illegible]八[illegible]

ずきやう　つるを源氏の女御をあやまつらんと
おぼしめし御いのりありて　孟 抄にはとどめおきて此ゑいとほのおそろしく
春宮の女御はあながちなりとにくみ　花 延喜十六年三月御賀有詔令喚皇太子ヲ大将太子八保明太子之
よの人のうへにもきこえ侍れば
日一日の源氏の御ゆふかげゆゝしうおぼされて
ゆゝしうおぼされて御ずきやうなど
細 御ずきやうなど所々にせさせ給ふ
へ給ふをきく人もことわりと
垣代せよと楽行事の仰に
垣代とは立て此内にて楽を　孟 垣代也警固
とぞおもふべし
かいしろの人
細 殿上人地下もとく　孟 有職の人
八諸藝に達して人に勝り
いとうまきのみ
宰相二人　細 参議二人
左衛門督右衛門督
明ル年　舞の楽行事
例 延喜十六年　式子　法皇
五十賀楽行事参議左
大弁保忠卿

こゑつゞみの音世をひゞかす。一日の源氏
の御ゆふかげゆゝしうおぼされて御ず
きやうなど所々にせさせ給ふをきく人もことわりとあはれがりき
こゆるに春宮の女御はあながちなりとにくみ
きこえ給ふ。垣代など殿上人地下も
心ことなりと世人におもはれたる有職の
かぎりとゝのへさせ給へり。宰相二人
左衛門督右衛門督左右の楽の事お
こなふ。舞の師どもなど世になべてならぬ
をとりつゝおの／＼こもりゐてなむならひ

四十人のかいしろ　細 四十人
人のかいしろいひしらず吹たてたる
物の音どもにあひたる松風
まことのみやまおろし
長秋卿楽譜云四十人
有序二人破二人垣代三
十六人云々　垣代は八池
下堂上相交ル　四十人の
数も説々不同
かざしの紅葉　細
のこれは紅葉を
挿頭の後撰云女八のとこ
え良のこと
して承平菊花をかざし
てあそぶ
かざしの
三年十月十三日
せうしの花ともよ
の花を作て
まといし　花
はるかに　の立木の枝とも

けしきことなる紅葉のかげに四十人のかい
しろいひしらず吹たてたる物の音ども
にあひたる松風まことのみやまおろし
ときこえてふきまよひいろ／＼にちり
かふ木の葉の中より青海波のかゝやき
出たるさまいとおそろしきまで見ゆ。かざ
しの紅葉いたうちりすぎて顔のにほひ
にけおされたる心ちすれば御前なる
菊を折て左大将さしかへ給ふ。日くれ
かゝる程にけしきばかりうちしぐれて
空のけしきさへ見しりがほなるに
さるいみじきすがたに菊のいろ／＼うつろひ

あゝりみつくり花ともいろいろく
くもりもなきさかりしわれし
さし八流の鉛よしきてしハくり
入おや　細河之 麻ニ有取銭
手ヲ故ニ云入銭ト　花云 家より
取そく逆して面白く舞すまし
時ニ二村山を舞ゝん入おや
の芭や芭ふてまうならと 後和
頭昭注云 舞は八入おやと
てさらに和そ久しておか
りしろくまふてすまゝせて
時分の入おやの声やおきさ
うしとしめうく　ろく
承香殿の御ちうゝ時四の女こ
細 桐壺の帝の御女く　眠 氏
女御ならるし
秋風楽　河 盤渉調也
其夜源氏の中納言正三位に叙
花 延喜御記云貞観以来
参議時有リ叙位之例　師 注三
位より正三位よぶれる　細 叙
以中納言下のくい　正
四位下ニ也　師 以中納言いまて
々ハ従四位上なりけりそれしとい

ろいえなくぬきぐらしてかふハなくこゝろよ
てとつくしうゝ入おやの舞そくろなし
此世のことくも見えしん。猶こしもなまし死去
とくなものみのりと思ふくれ山のまろ我なま
うけりれさうさんのすゝしりのくるこゝろなる
こゞゆらしきもう承香殿の御ちうくの巳乃
こゝそれくハゆて秋風楽にひゞくる
んさつぎの又ゆかりきうこゝれくまゐ
しろさのつきまれじいとくよめとし何
らうくりてそくとく御しまやありなん
その夜源氏の中納言正三位にのぼる頭中将正下
のついしきみゝんどらめはこゝろさすへ

細 武家ちうかふハまいさう面白しといふこと
細 面白き人
感涙之
異事　恙 哀哉之
細 あまりの面白さおもよ久りて異なる事は世俗にいふ
此海波よ沈ての事也
次の位なりれハ宰相よ宮位のくらいにつく
加階

まよ一階くらゐをくはへて
正四位下よなりたまふ
さうくなしうふるく源の叙
叢のやうゆへ宝宮あれハ
さうれまよ　よくひ
今のくしく　細 葵上の
性をよくらちとうらとけ
ごうやうに平生のあり
さ故あり見きるやうよた
なく八他人のいろくるゝを
あり女のしさ見そなく遭慈
交其人にたりせしより
恨らみのありし　眠 遭慈交ニ
其人をうらみて　師 えん

きうぶりのしうつびまつもとの事
ひかれて各昇進とし給へく
よひかれきまへろすれバ人のめともやど
ろうし給ひとよもしろこゝそと給ひ昔の世ゆへ
しげなり文ハそのしろまうで給ふれバ
源のく　さいのみよりやしとうらひあり
直衣ハ給へて　こしふろく給ハいとのかはさハがれけれバ
とめのよろこびしかバよらなて給ふ二宗
の一向くるさたりけるへとハ葵上のさまハ和ゝらうしく
院よりはんじんまかりと人のゆめ
まれバいじんつきみしとすがいかう
源氏の御かぢとなし
らくのあり女ハまり給ひことし
さんきしうたれバいむう何ゆう倒
の人乃やうよろしきの給つべ

昇進のよろこび
細 源氏の昇
細 叙つかの文くにやうよてハまうんてきしきし
細 源の前世の宿因
細 葵上の御やまひ
葉の上のゆるく
細 葵上之
葵上
源のく
源は名うてつくちよる

ぜんさいしとハいひわづらひ
御よわのめりしうらむ出ん
しんゆうしをもおくりく
をうとあかうさハとのへか
よそひ給をへし
まわりうしこもこそみも
孟葵の心ともやすらせ給は
いつくの程るりをむそう
とく
人しりさおもり
細なるくしのはかりえ
そめしらゝ御も心を
論そすな地とゝく孟葵
と八源十二歳よりとく
心さをもおりおぬ給して
のしめ　師えしめ源の
女葵のおりおぬ給こ
そハなるにも又んじ給
かゆしを集よハ葵の宮を
人のやうにからくしうれ
なさやうたりけんすれハ源
の心乃へそてたるさをつゐま
ハをおりてをひるそ　給
又とゝみむとし

てしらりとのゝまへとく
なくうちわりてたゞくさめきこしてらん
ねと思ひくらべはのことりるいのかれんびに
さかたまさまさまあらけのじなのりするひと
をおくりそぞし人のれにありさ御のうさ
かはそのしるれおりぬしみやゆるこうずも
なし人ゝりさればこそのそしりゝハあ
これはやむごしなうこつゑをひあ宮
心ともさりすぬぬ御心そおとめつ
ぬるはおなどをされまえしかごしく
うかくしりくぬれうろの給もどのつ
くしとしはあまつてゆくしいしわうりもより
給されきん八いうふまくまいしてしれ
細 葵上のいつくしうひかるゝとの義也
不足ことき成し
孟 又やうにくらう
つきかりんをさのひとし
自鬼よ又かみそされんよの也
細 そうり第五のすむ
細 又すうひのしく　師 俗にも云てみちとえ云同

むれまうし
そうらもちつびてころ
たり

まん所をいり
孟 政所家司　師 家ける
とゝりたこうすふねの
なり
とくまりつちて
別してゝりわきをそ源
の人をえてひまふなり
一本よてらくゝりうそ
孟ことりくハ事とそ

心ざし御しくらよてなりまんかまくひうれま
とりしきこし給ふそうしみの内の人ゝうまた
れとえうしせしと出かりして程ゝるすれすうそ
よ出まはりひまにかしきこくまれをめけく
まいりかはして御かの内のはひしてもれをそ
へうそうしまそ御んりまうそ所しくもせんたど
しかしてほりたりをうれいひとめのためなん
へまうんやうかせ出かしうかまん所けい
るうしはつくかまうせ給これは御いまり
しかなどもくらしめしけるもうりそぐいり
ほうの人ハおやつけつゝのそむひささしいか
のちこそやもえそうりそてし給ハざりけれ
孟 二条院の内の事
ほんてく
女の対の奥加へし
源もく
二つとなく
紫のうへは
白き扇之 師 白扇 夜給く
細 めのとの人すなは
細 こまかなるさそく
細 女ハの事なく

北方(紫上之)ハねたくおもひおきこしめのときハ
わまえんとてひきとり給おりふから。
(源氏之)君のせんじすゑ(?)しハ思ひうらみ給ひ(?)て
(けまし)ハなくこそおもひまへ(思わうらむ)ごとう
このれいて御なくてぐるれバいぞすゑを。
(紫上源氏之)もてなしきこし給ひなむど。いかゞ
らうたうおもひきこしきこへり。二三日内よ(内裏え)
(源之)まりひ(大臣のく)とのみとせはしろかりしかバ
(兵部卿宮の屈し給て)とゝもくたゞいまへバみかくりしきそ。
(紫上)母なきさみりうんて(?)地もとくおもうきを
(源のく)もへ川みかく(?)一見し給。僧都ハうくいけんや(?)
てしめてわやきさまにわうしうれしとたん

僧都にハくたんとてめて
細 源くハ大田ムて給ヘ僧
都ハいかさくヘ思給ひくし

按察法ゟなと
細 紫上の祖母の法うく
故つかのすゑてある
(細 源のかす侍ひきこそま)
いりあつて
令娘中納言の老中務ナと
細 二人の名なり
花鳥 河海 細流
女ごしらんハ女ゟしり少く
細 父ハ女ゟて兵部卿宮とえ
へやと此り

ほどなくもろ。故尼法事なとして四十九日ゟ過ぎ。
(源氏のく)いとあはれうおもひとぶらひきこえ給ひけり。京の
のまゝでもおはします三条のみやに。これおはり(源の君つかひ)
(とゆりしくそのかうて)き海もゆくしそまうりまれバ。少納言
中納言の老中務なども。やうくのへぐいと
(源の人く 細 姫君侍ひさおりとお話へとまで)めんしきりけるや。ゆりそなし給なれ
とやもうしくれ奴り人ども。へ河めでて大かたの
(細 若宮の兄弟紫上の父)それかうりきて給。宮ニ兵部卿宮の大はまい
(細 源く)ことまへり。この君おもそれとてうしまてしまひ
(孟 兵部卿宮の孫と源のとの御あへ申し)めへしまつりにしかうて海ましてい
ろめりしけむびるつるを。女ゟそこうんに
みしうりぬべく。人もれどもまてまいり

さくいつより
兵部卿ハ紫の父藤の兄なれ
はらからによ似しく宜ふ
なり
ひとよみをとおもしろくそて女ま
てさとやし　細　是も女よ
ならて源よ向ひきこえしこと
ま給ひて入ハうけてもむよ
紫上のをハうけて去あふし八まり
とりて源のみかへし孟紫と源の
あいそて源のふかくしきるま
つきそね色のゆかり女よ
なりてみきこゆく
人のはりてみしにけらく
桐壺の御門源氏をさかれ
くせし時藤壺と親しき
やうよきてみしおひするに
桐壺のをよゝへもつとり
あさきゆゑにらうそてみる
よみすふそおやしくもそ
へつきそらかんもう紫あ
しし給ひそしらふくし
きくそわかつきし
まんみうらくとみえすもつ

給ふもかくこゝろつよかりてそてこ
まやうまれりのかうりたどきこえしあ
このほかの御つねよりくるよ何かしう
すらしけるくるをいとめてくしとこゝ
てまつり給ひてしこよなうかうしうら
で女みてこゝろやしいろめきこえれはよう
おほしてくれぬきこゆるの御よ入すさき
らかゝりくむりしはらへのけれそうゝ
とけうくんつくちしてゐむゝこうて
あひしとらよたうらしまへるもつら
くおほゆかそわりたすや、たてくしもさよ
らぬへきれしこそしも給ふね限とい・と

らく　今ハ桐壺の源氏
とまう　まそまうしさ、
とつゝくせむへと思つれ
の御方よりうしくありてる
しまゝハむまうし源の御
心かうゆへうくもてしたまう
ようきさとうりうくつゝく
そしめれとゝし
かよのたうしりまくて
源の叔よりふ和字りとと
うひわりさきよ志あし
をかけとし
少納言ハ此めしとそ
細文是しり紫上のうゑを
いてへるうに源の大切
よし給ふと云なり

のつゝきよりて作りさまへきこしな
どいひしを給ふんこそうましくわたし
もくるまうしいそのみね、含梅もよくうら
きえしかうれくしその御かくもあらし
よりへしつゝかうさよしかりとさそ、む
とけぬれ者しさもかりしりて好しき
れかくよのむかしかうてるもゝかなる
のあやしかりぞゝうことうつきよつ
ことにかく少納言ハ殊ハ此よくしき代よと
若れ是もこれよへのこれは申しと世か
してはとこえひらもいのうきそくのひ
し給のけむりしみやし此か経、此限のよ

ねしなびきんほどにはむ
つりしさくとりやく
細 紫上成人ありてハむつ
うつくうわくへさくく 師 事と

此疾姉かどく
母方ハ三月にまことにそし
河 物忌令曰祖父祖母父
方者暇卅日服五月母方ハ
服廿日服三月 孟同
細 花鳥云除服十一月晦日
とあるめり。九月よりなるふ
きハ十二月よりなるべし。ある
八十二月晦日なるべし。ま
よ男君ハ紛絲よまいり
給とあるおなし十二月よ給く
弄 葉の祖母逝去ハ九月十
日のことありき九十日
ハ十二月ひこうるべし。晦
日よ除服とあるハ日を元
らひ給うや
又歎きなくて 細 葉上
ハ母よはいとやくくとあれ
給ても紫祖母の類親
しもかく給ひよ一給と

いとやむごとなくておはしし。こうゐにこもりま 細 六条の院息所をいふ
さうつるハ給ひそまうことよ母となむひ給
いん母ゝよハ。むつまじきことりやとあへて
されどうらわきのひまつるれ 源 紫ハ別してよろしく之うたかれ
やどいひしよりしきなりし。 葉の祖母の服をて
あハ三月もそへよそつどりにハ 衣をとめしうハさせすあく
つまあぬやもなしてはひはぬ給し
うハすびしゆさくあはいあくそくれかさむ 細 こやうしき衣あらかねくし
らうれ山おさのびれらきうどれ 女の祖衣裳之
うしことかしとさきまへるさ
いゆめうしうはしきられ。は。えは、 細 源十八才
てうくいはまつりはとてきしのぞさえ 葉の祖うしゆん才

服の色も。浅さうしと源のお給へ。河海抄ニ紫上の服事ハ母よハ
給てうばやうみひしてまし。しく釈もなくてはひりて給くハさらさそ三月の服なれ
一かどとゆきしの後をわくりしたり。若紫巻よもしびきのこまやうろとき給ふ
えうり。鈍色の中にかとしこうをとこやうなうしとにうへ云ことしも除服ハ
らくハすれ母をさうぞと見し。てまりぬくられなおうちもとみ紫とのぞこそ
色としハいつまさうべき。紅梅りえぞさくしらんを非梅さく
へとうや 師 他のうきりしとハ衣すくハ織つけぬらく
まうらハ 河 朝拝 朝賀也始自神武天皇云 去延喜五年被停止之同九年
請也 細 花鳥云みをくり
花年うかりく源氏八十
ハうよなりあよ羽孫ハ
正月一日の小松孫をそ
給うハのまよハあらん
宮殿の前庭よ諸臣
深く花く 晴日
ちやうちとして 孟 除夜
儺と追るに之鬼やらひと
いふ追のなをやらふとは
之大儺の日をも鬼やらひ
と淀く始自延喜中今ニ何
家ニも行之 追儺ナヤラフ
十二月晦日也 皇青朱衣ヲ
手ニ桃弓葦矢口称ニ鬼之声ヲ以
駈ニ疫鬼一至今歳除夜

つまうより八毋となくしぬまもり 源の御こと
まうあへときへる。いとめでたくそうへて 細 源く
さすへりいつうもるなしとなし 紫のこの御とも何となくし
さするまへり。三五人のくもりしひとしう 起 仲 雛とあつりて
あづくとういひむくてよちいさ所 屋 細 紫宮く雛の追儺
まおい川めくとはまつるそまも所をとさ 師 若紫よ臣大君へ
ありうけまへりなからふうてしいぬさうまれを ひろその屋とくらうるく
こ母うちよまれかつくろひそくうてい 河

為之ヲ河海ニ具ニ取要書之
河ニ文武天皇慶雲元甲辰十二月此年天下諸國疫疾百姓多死始作土牛追大儺御記云今年愁晩儺此依不能疫鬼去且御祈司ニ

とだいじとおぼいたり。げにいと心な
き人のしわざにも侍るなるかな。今つくろはせ
侍らん。けふはこといみして、なゝいたまひそとて
出給ふけしき所せきを、人々はしにいでて見
たてまつれば、姫君もたちいでて見たてまつ
り給ひて、ひゝなの中の源氏の君つくろひ
たてて内へまいらせなどし給ふ。ことしだに
すこしおとなびさせ給へ。とをにあまりぬる
人はひゝなあそびはいみ侍る物を。かく御
をとこなどまうけたてまつり給ひては、あるべかし
うしめやかにてこそ見えたてまつらせ給はめ。
御ぐしまゐるほどをだにも

のうくせさせ給ふなど少納言きこゆ。御あそ
びにのみ心いれ給へれば、はづかしとおもは
せたてまつらんとていへば、心のうちに我は
さはをとこまうけてけり。此人々のをとこと
てあるはみにくゝこそあれ。我はかくをかしげ
にわかき人をももたりけるかなと、今ぞおぼ
ししりける。さはいへど御年のかずそふし
るしなめりかし。かくおさなき御けはひの事
にふれてしるければ、殿のうちの人々もあやし
と思ひけれど、いとかうよづかぬ御そひぶし
ならんとは思はざりけり。うちより大殿にま
かで給へれば例のうるはしう

あんなるにもさく笑止……
よう不審なりし源の
地なりしさくめてもとへ参りて
んと葵のひとときと思ふ
あらんべし
思ひあてさえつるぬやうなるも
すみしてきこえる……
ひまはさしもなつかしけれ
師 葵のうへは素の事を
うちとみえぬ事ありけるを源
ひとかたならぬことにてこそ
しれしかしはみえぬ
つるは葵の上もされけるよう
らんともそのいらへ
しきつらく

二 ちしうへまて御しきはさ海みてならく
しき御気色ありけるしまれへきこと 細 源の御心よく
よりさまはうらしつゝそあなるなれ 今このやうに
さしたりけれはしかしはしまへ 若き人々しくも
とわたりくしへてりつら給ふとまし 細 二条院よ人々とあへ給ひて
しりはやむことなくおもひさたまりて
まことそこもとの給はれてにくく
さはりしく御心さまへ 孟 葵の源と二人の御へと 師 葉に給ふ
やうよりすてさぶれさらはけるひま
ハえつもなつかしはいへんへたうく
えまへ御ひ御気色りいひしたらしむ 孟 葵そ
源は四の姉君ハこなたへ
せつらうこれからよ地もしもれいつらしくし

葵の上はいかはかりにくからぬひとくのひとのへ
いかにしけれはさらはりてとのかくてこそ 細 わゐハ不足なり
かまてしらハこれ人のありぬ所へ地しまふ 源の心
我心のありさまもしりしきそれとはひとく
うしてられそてゆけうそうしとはれえりと
なさはれとも大臣しきてゆかかしはなれやむ 細 葉子の地
こしけくはもそうかうしや 細 前代のはあり
いつもうしつら給はんとどうりいひてまへす
てらうへもとうらからとひはいめ心してさ
とひまへてし まするとはしき御心さへ 細 源ハ何たる給ひ
とうしけしかしかはいふはかくもの 細 すこし 数給ふ何たる
てとももとうへし いとともうくこのりさ 細 葵上父地もく
かなき御心 なつらしとさひまへし給ふなるへし 源の葵の事

わすらんやうしうへこの人の
孟 葵ハ十分なりとのあるし
不足もあるまれとも
とあぬ人に
わりなのありきり
孟 されぬ秘なり人と源の
わかんなりしとかりけれは
とのあるし 師 源の葵の
まことは人を余りて給ふ
のこととつくさいようらぬ
まれ好色のもとすみなり
まれ敢葵をみしうもそれ
おなしきそのかく
ことしもかくかくとは
源のかしも終ふるそこは
あれそ葵上のめさまり
ここそのふとく
なくうけいそうしりて
源ハ葵上をは何とそのさ
やうはあめかせ人へさきとそ
太くるよりそうしかりて
あふの人は葵上もさ心隔
あそ源との中らぬ
とくし

法らかそておゝふ　元日の
夜ハ曲ろくよゝありぬふ
て二日の祝之
名さうさ御帯　細　玉鬘
ハ花ちる里物語よ云々
世中ニハ名高るさゞわろ
御帯あるさあるゝ中ゝハよ
ーと此内もとくとりつてさ
せまてなおまされ朔日よ
てさへいなごわれんなり
りおさうれなくてあふ
今東昔名ある玉鬘よ此
落花飛鶯通夫みど名あ
るぬありし
うれハ内えんなし　細　源の
旧し今日のあまハるとあふ之
とくて数敵し給く　眠　正二
三月中ゟ清涼殿ニて文
人ど召て詩を作り諸臣ゟ
召くて賜之・主上并執柄赤色
の袍を召さて保元ニ信西卿
行て侍ハ絶りたるを之云々
勝さ后宴のゆへ公事根源れ

うそてまうりあへるはなくくくもいかれ
てりしづさいてともかうてしまふ御心しめて
お絡ところよふしのぞこさのまく御さうぞ
く志まふよ花さすうさ御よびて例のしさ
さそてまうりまて御ぞのはうまうる知さ
つくうひなじ御く例さとしぬなたん
めしまふいしあくれなり。られハあいえん
なとおもしるう絡ふやうのあそりとよ
こそなとしうそしまくどそれハまたれる
も絡うされハうめなれぬさ海なれだ
なんとそもまあそてさ世なりまふ川しるい
よゝしづさまくえなりはまよい出つるひ

ー海さうゐても　細　源と八
りうをあるうなりともむそ
なさつへゆくりをさやそ
ゆくなり
一院　細　花散るよあり　花　此一院
ハ寛平法皇よ勝へし或
ハ陽成院ともいへさとや
ちく　眠　先帝とやいふま
しゆえねとさえり
これ御くるゆの　細　藤壺の
懐妊のるし　花　藤壺此れ
産のゆへ去年三月に藤
壺御出家し　まて源氏の
通し給ふ三月より八十二月
八十月にあふれとも誠ハ四
月よりのことなるへし右
れハ正月よあふれどもお
さうるし頃よ二月十余日
よ御産ありし一乗　源容
通ハ四月之御門の御子なれ
も三月よりなるへきんく
正月ハさうりとことのゝく

ありさ海よてをいくらん人をいづい
まいりてしまんよまりとしあくしとえんく海ふ
さんざしよりてしもあわりことしわもありさ
絡ひじ内裏まで一院でうりそて八藤つぼの三條
のうやふそまいりさ海へるとしと日ふ
とえし絡ふる禄び絡まくにゆしゐきまて
なりまさり絡ひありさ海うるさし人々めそ
宮ゆ御後ハ此本丁の御かたの海のさ
ままつけさくも此り日とをしとえけりまう
これ御くとの志うくすもうみしらないとなき
よ此月ハさりとことやと人を待さうて内
みとさうれひまうけどもあうにつまぬくてうる

身のいたづらに　花 義とも
云べき人ハ物わかりて身のい
たづらになりぬべき事也
世中のさだめなきにつけても
こと
はかなくてやとハ御平産をさなく
て御よ御命もはかなく果なん
かとせよりあつめと八源
氏の御心とさまざまと源の御
中のなげきとなるべし

命ながくもと　紙 若つ
のたまはせけるてよいう
みすぐすやとハ
花 弘徽殿の后方に此時
何とも成なんと思ふべ
きを。にくしと思すらん
なよそれ〔illegible〕思ひつゝ
てはかなくならば
ふべき〔illegible〕をおもひ給

ひるしくそゝるし
り若童の〔illegible〕
弘徽殿に〔illegible〕て八世の人
〔illegible〕
〔illegible〕
〔illegible〕
そこのひまれの〔illegible〕
〔illegible〕若の源よそ
せ〔illegible〕賓ハ〔illegible〕せさせて
〔illegible〕源よう　似〔illegible〕
〔illegible〕
〔illegible〕
さ〔illegible〕
〔illegible〕
〔illegible〕
〔illegible〕
八源の〔illegible〕似〔illegible〕
〔illegible〕
源氏の御心よく
〔illegible〕
と云　謙徳公集に
〔illegible〕
〔illegible〕ハ心の鬼を見
え〔illegible〕

ぬ。御ものゝけにやと世人もきこえさはぐを
宮いとわびしう。このことにより身の
いたづらになりぬべきことゝおぼしなげく
に。御こゝちもいとくるしくてなやみ給。
中将の君はいとゞおもひあはせて。御ず法
など。さとはなくて所〳〵にせさせ給。世
の中のさだめなきにつけても。かくはかなく
てや。やみなんと。とりあつめてなげき給に。
二月の十日あまりの程に。をとこみこ生れ
給ぬれば。なごりなく。内にも宮人もよろこび
きこえ給。命ながくもとおもほすは心うけれど
弘徽殿などの。うけはしげにのたまふ
ときゝしを。むなしくきゝなし給はまし
かば。人わらはれにやとおぼしつよりてなん。
やう〳〵すこしづゝさはやい給ける。うへの
いつしかとゆかしげにおぼしめす事かぎり
なし。かの人しれぬ御心にもいみじう心
もとなくて。人まにまゐり給て。うへの
おぼつかながりきこえさせ給を。まづ
見たてまつりて。くはしく奏し侍らんと
きこえ給へど。むつかしげなるほどなれば
とて。見せたてまつり給はぬもことはり
なり。さるは。いとあさましうめづらかなる
まで。うつしとり給へるさま。たがふべく
もあらず。宮の御心のおにゝいとくるしく

まことに人のこゝろもちにしや
ゑくしよ源よ似るべからず人よ
推量をやせんと人のおもふ
ねらふすまてもちかく

此こゝを今見なぬるもえ
ましうく人のこゝろそまゝるもおやしうり
斎藤のうらく
つる種のあやしきちとますらに人のそのひとつ
めでやさしぬえらすさこしとすくにらず
とりもしみろよりうるゑのつみよりり
世
いづへさよらし地あはしつくらよ身のそぞ
細 源のみ給くく
ひとめうき令嬢のあまよ海ようよあ
いろくのこゝと談あひつく斎しく
ひあそしいそうこしえどつしきへどな
斎ゆくもなくさうりしとく
みのうひあるへさまをあるんにまり文の内と
ご覧りしみこのうちた
とさまりるく地がつりなすがり安かしのへいる
細 令
海の伺く
どうらしもあれがらよの給へうはちわ今
細 内人源まいろの時見まへきようしく
とのつらしくそてまうせ給て人とみせたく
なりしき人るうしれうてよよ鳥しなさし涙

師 令嬢らいまも源の御心を
察しろく気よおもひやりま
いくまうくへはかそいうれね
地のへるなりしさ
細 源え
いきれうれ八源もあつらは

八のあそれ令嬢もらよのを
せうるりあれハうまとり
ふしろうしはつくし
ごうう海よ
細 何とにしる妻
そうらく孟の世ハすうふ
まとうまて源のよくさめの体す
よそへて源のよくそあてえ
つらうらこちもそれとされ
細 何とも名のうさら契えと
師 一みちもあの中にりのみとく
まの世ましはしそうれうる海
宿をさくれうり源ともこひ
まくいるうちのね斎しきを
まさに令嬢もそくしさるも
細 令嬢の方
えおぬく
えてもせふ
えあ家のけりすえみぬくさとハ
源え師 子と上やそよりえ
とりよまつしいあつらくて
人の親の心ハやよえあくるね
とともそうそふかやさよまるよ
ひあらうる

源氏の御心
うらうらうさとそとなれバゆみはよまきえの
給をでこそうらん世よ人つくるうしでうき
斎よまこいめどねうひあたく
こくしませんしえそたすひすふゑ海でそうらろぐ
あしさ
源
いうさ海よひうしうしむへる契てそ此世よ
斉世の宿世いうふつうそくしち給ひ
うしく御中のへなそそくうもうしくしそこうろ
えがこきれとのあふ令嬢をゞ文の御内は
細 さ奉りうしくみるちても
あひそうらさらく
どれするさ海なしどうひなりうよえいしさる
うそはいさるのうちあのしえ
令嬢
えそしもせうらねのさらこいそよなけんしいんて
まとおそよあり
やせの人のうふてふやさしあられよ心ゆう
ゆくむるうしもなさまくに倫哲との間あなさきく
ひなうき涙らしとまりうみと思ひやさくきく
令嬢伺 河 無心遠 師ふよ
ちえき

かくのみいひ
細 かくしてもなぐさめがたし
命婦ども昔おぼいたりし
やう〳〵うちとけむつびたまふを
細 此源の御あまり命婦を
もうとくおぼす 孟 江次
どかれずよりもとのや
うちまじく御物思ひのまゝ

四月に内へまゐり給ふ

およすけ給ひ
細 およすけはおとなしく
き人のさまれば(は)い
づまも大きに成と也

かくのみいひやる方なくてかへり給ふ
物いふ人の物いひもわづらはしきをわ
りなきことにの給はせ思して命婦をも
昔おぼいたりしやうにもうちとけ
むつび給はず人めだつまじく
なだらかにもてなし給ふ物から心づきなしと思す
時もあるべきをいとわびしく思ひのほ
かなる心ちすべし。四月に内へまゐり
給ふ。ほどよりは大きにおよすけ給ひてやう〳〵
おきかへりなどし給ふ。あさましきまで
まぎれ所なき御かほつきを思しよらぬ
ことにしあれば又ならびなきどちはげに

かよひ給へるにこそはと思ほしけり。いみじう
思ほしかしづくこと限りなし。源氏の
君をかぎりなき物に思しめしながら世の
人のゆるしきこゆまじかりしによりて坊
にもすゑたてまつらずなりにしをあかずくちをし
うたゞ人にてかたじけなき御ありさま
かたちにねびもておはするを御らんずる
まゝに心ぐるしくおぼしめすをかうやむ
ごとなき御はらに同じ光にてさし出
給へればきずなき玉と思ほしかしづくに
宮はいかなるにつけても胸のひまなく
やすからず物を思ほす。例の中将の君こ

疵なき玉と
孟 源氏はしきをまふよう
てたゞ人になされしを
御後悔のところに此御
子御誕生まで母も藤壺
の皇子なればきずなき玉
と此御子の御ことく
いかなるにつけても
宮の心ばへむねのひまなくぞ
おぼされどあるまじきこと
てなり。源と宮乃
似たるにつけてもの思
ひなり

こゝろ〳〵にあそび
孟嘗ハ斉の孟嘗君をいふ
これより明暮
細 源氏にハ相手なき人
とおぼしつゝ人のふかうの
なげきをいはむ為にハみなるを
しらずてうつくしかりしを
のくにおぼしく
或そらしうもあらじけなく
もろともきなき表ふとよ
細 此誦のつゞき詩経にみえたり
如切如磋 如琢如磨 瑟兮僩兮 赫兮喧兮
文殊あり 師さまへは
ある人切なり など おぼさ
つらなく
我身ありしにはてうらん
似たるにも似のひるえふ
けしからんと源氏の御身ながら

かきまぜてはあそびたまはし給ひ。わづらはさ
物すてまつらせのそて。みことさいらあるつこあれ
ど。そこどのきおんゆく御ども明暮
きしられバ思ひもこそつや。おもんばとよ
くとぞ物しくられ。ちいさき程ハされく
のこおわづらやあらゆるそでいとゞをも
うけらしともひきこえさせ給へり中将
の思ひ出りての久々そらなりして物そろ
うしもかう思ふ〳〵わらくくし。表ふとも。
わうくうけろなりしそ。渡物らめのべし。
物がたりてしらむしてゆかるがいとゆ
ゆかしけらし。紙身ながらいられけく

細 天子の御心の
細 勅定々
源氏下心

あまりんはづかしういとうしう物し給ひぞ
わたくしかりそめや。宮ハわりなくてはべいい
ささよおぼえもなかれてぞ侍りし物の中将
は中くなりの心ちのこころざしのかれがま
ぞでおもひぬ。紙れりてまかりすそむねのや
ありこなたさと。程もなくして物かいつのへと
物俱して物すへの萬歳のなかにしたくあそこ
まられの中よりくさきの御ころやうなる美しき
しられ物しせまで。今日のえいかりよ。
あかしと物得のかくし
しつくころいはすくさまなく
ありけさまからなぞらこのゆかれによさうる

細 天子の御心に仰せらるゝと
のたまハられしかるべきを
かくりてむちのこころまで
やうへども物つぐを
物がたらんのはうかなき
思ひなるべし
まへつみのよ
いて花にまつでみまし
まさうすくさきれバまか
うもつき撫子の花
孟嘗などが前に盃をよ
そへてみるらしきのなる
花よされん
さしそうといつしうも花
きうがんにすへつかへ
佛前なとを奥のかたより

そへられて源の御すさびや
をんと思ひしよさもかきさ
あけひろきとく 河
くらかりける まりもえ
うかさうしけりくさけれ
どもさまのうるされは茎
とすよのせうえまく、て
さく 細一院けりそ今
物思ひやも取く
やさ花の名よ ひるそれし
のなれひくるよと八兵もと
けり夜と ひく
袖めかしゆらり 細物思ひ
のとね とやそて 孟源の
手よいはまへて ぼろうはは
あくさやそして参りきまさ
ると おもさうて袖とね
つまうろく霧の中ゆうりそわ
きよりまへて花菱も良殿
そうとろれは花ひもやえは
うしましきよのんて衣ゆ
袖かたる組まて袖
袖と強より手にう
ゆのうよくつれしうや
なう代 孟頭の内侍も
ハ手よわれそりかうう
やうよわるそとく
わうれうううさせてうさ
暁大樹うりとまく
女衣とさしまとぬくう
ちとさもあやの下は
うれく
みらしなかりとくも
明てとさ切て物うし
なうらくも渡りさ
まうねと下へつくく
源のうつり給ても紫上
のうさへやうても湯りさ
まうぬとうもを給く
うりめちのその
河 八わそてハらうめる後
の業かられやみしくまく
孟 紫のから色そみそま
ゆくうらうくの物かさ
師 源とさうそうハまく
ゆくしうへるうのおかきさ
とらのへく

んと思ひまへしも、ひるまさしよるは侍まれ
やとわりさりぬべきひまもありかたき 細 夜つかの暇深く
源氏の文を若人へわらんとせらり
わらんをまかせて、しづらかなるけしき花のか
みし夕かほと我れにくみを思ひしみ 孟 夜つかの情也 まれ
笑してる行きて 夜つかの師 細 情絶八夜の袖わたしとの段に孟情也八源の
袖わりて、寄せゆかしとおもふも撫しと
とる まれぬやまとをこそ侍らめ 早やさ 細 命婦のかれしらそく
りさきしらやうなる絵もうしひなどうら
まてまかう例のことなれは思ひしあし 細 まいの出見ししも入やうとうてそ絵そてすかすく
うしとらずそれて、なかあふしまへるよしは
あるのかうし給く
くらちはさそていうしう姫しうるを撫菊 それ ゆら
ねなくしくしりしてうなう
うらもれは例のるゑくさあすかは 孟 源の内侍
いまそてこくうり給まじけれたくらゝふ 源の内侍もへ思ひられてふさるゆく
ぐしきまえるえにくさむわざれらうら うしゝうねまさく
せく 翳うくそ声やおかや
きもうさみぐくふえをたりけりうさ
そうひつくのそこきあへれは女君あり源 細 紫上へまつ茂こ八絵の
両身さ云さく師 優美たうき風く
花の香よめれさうらしてそひ始
しまへるき風らいくしうらてしけなり
あひまそうへやうへくみとく物もしあたか 明白
めうさき風のかまらへ倒しあかく
孟 源のこくもかゝりあぬを紫の服色しまめく両流説
らさくもさくうふ給ならぬおか風うみめし
うりまれは倒すしぐもてさうへるやうまへ
細 源の久しく紋束やとうしくこうわう
しゝとしのうさまつひ居てうらやとの給 わ
源氏へ 細 こらんく
へど、物うくて入りぬれば、そのとくらいもとき
紫の上

こゝろにおもくえ　河 倭琴の
海人の刈藻のなまよろづにも
えもいはぬ人どもあらゆる
五常(を)ひてあそびさき
ときこときくみちもあるの
ありてそれとなく
さうのことし　花 筝 筝声
人世謂蒙恬為之絃有十
三象十二月其二以象閏
也自一至五大緒と云自六
至十中緒と云自身為至
巾細緒と云称之絃ハ巾之
唯中のおそとハ巾の絃
のことなれし細緒よりも
細きことなく中のことを
といへる誤也　細 筝の十三
絃のうち斗為巾此三の絃
第一のおとそとの中れ
かそさきく其おとその中れ
すぐと身を中のごとう
とそうやうて此の絃ニ
平調よもとよらうして
唹 よてのもくへり一越調

ひく、口惜しきひしやくるさ海いうつくうぞされ
てられく、わがおやくひうつるくちわれ給
よくりけるみなかめよあくはまさなこゝとそよ
もて人めしてこれ琴とらうもそくひきせ給
なまふきさうの琴は中の緒ことのくかうぞれ
うそ敵だけ給ひしそ、あそびてよりし
らぞしてあるく給のしさあるをせらのひとき
てさやうまへれば、えむしもとなずいとう
はらくしう物きますいあちいさぶれは給まさう
あらりてゆし給はれてつきいとらかう給
じらうつくしく出ありして給ひあなどかりく
と(し)へ給ひしくらしくあれしりてきこし

（紫の上人）
（筝は琴の曲く）
（源氏）

とおしあるまうり一越調さぶり一越調ありぶり一越調とハこてもと手のもく
のあるへしせらくもらうく、あらぬを一越調と云又保曽呂倶世利ハ狛の一越調乃楽之平調の曲
よハあらはまず平調よしらべても調子をもとおもしへ狛曲呂の楽よまよりて
るぐせりをひかれりり殊にま一越調と云ハをも平調にして呂は調試大将入唐之数号ス
觀喜院定ッ　河平調子筝の柱をさけそらうく　細巾の絃ねせまししらと手のなくよ
えあくじもなぞ　孟うしらことをもちてあらく　帥　例あるしもむきむふどえよらけそろろ
ちいさ絶れ物としとしやり
てゆきおふ　孟ちいさされ
まうそとくぬ給まさ
しやりてひきすますく虫ハ
花のをを押ゑく　河由
師糸と花のをまくそて
糸を吹などかきまく　細
あそろくせり　　長保楽
の破く　河　長保楽の破ハ保
曽呂倶世利急ハ賀利
夜須
名ハおくなれと　孟おもそ
ろぐとは笑みくきえ

とをじ一わたりかしらいひとりも大方
らうくもろおりしこれらうろだへ人を思
事ちきふと掻きを、保そうぐさら
柏は名ハめくものしとおりしらうふさ一近海
しますらようきありせまをわ
よりしらうずよ身めさらうおわてるよ
らまうりて思どもおどしはしをまうおひ
でなかべしとあつまほどくへぐこはつくら
笑てあなり給ぬべしなどいうてはあり

（保曽呂倶世利）
（紫の上）
（河柏）

なもろもうして
源のおもひ人を紫の上
乃ふ真しまふきゆく
ひとひもこころそまとめぬハ
元 毛詩云一日不見如三月
まろもねしく
紫ハまだ幼かるれど紀や
そしみのおひ人よ源の
とうろえをこまへバうろくう
らくられまふれすハ左
扱の扇乃氣よさりバと
名て今の移ん紫の方に
いたうえ玉まふぞとの
まゐく
人のうこせうびなまとも
今くわりとそし人の依か

例のならそくて、うしまつり。忍ともこと
てうれずしておハしゝれハいとくらたくて
れぐしのいとめでしくこがれりしかど、
くさわそくおれかゝしハ立つしやあるゝ
とのまへいぶるつきこまるも秋も、ひとひと
こころそまうぬしいとらるしうそされ
どゆさるくおゝみちの限どはいるらやすく
やひろこくてずいくねぐらくしけ
人のならやおもしとかひてひこうし世れぞ
えぞしくもありかそゆまおしくまよ
てハ何人もさうしはいくまじく人の根こそお
じゃりくれも世ゝよかりわりてぞ

源の令とあらくへて紫よ
めをゝ紫のへしくわひそハ
人のならとしく人のくら
こと伴へハも恐念を指
さ海の死をまねらするもわ
まゞく

ゆしこ居たらうとも
うらひ死もろ居そど
のえさうぬ道なりと
りて急傾し

さ海よこしなしく八とゆりくそなこゝ庵く
とくうしひさくしまへだよすらまるれ
うしくそどきらくもいつへ人をそて絡つぞ
やうくれひさまよりくりてねびりのあひ
めれハいしらくらぐるしくして、こくひハいで
もとぬめてのさまへバうれしらて地もの否
どこあさよまうへせさら。姫君れつし
まうまひてひそむぬめしくうしのへで
すぐさとをてゆさまつりくめろとりまの
なぐしまつらいしもちるひよもさひて。内
らハねのひゆうしとおやうけよ云ふまく
まばかりあそこうしき道なり

母宮のようこうとされハ
源の葵の方へ地らんしまさ
んと思ふ者ふ乗ゑく七盛
の上まとめられてまうり
かうぬなじ地ないとの人ゝ
せしわうんゝし
いまうしその人とも
上臈ありうバされと云れも
し又さやうよ源氏とされ
まつりしさハもれるどハを
まじきどおうにはらハ
あまりしてろかくき人を
わりしとて
細 いみけ
ならけよいふけて
てとし八地されくてくめうに
おきろ御人とハおりうし
でふ思さちおもき人とうし
とき語しとよりうくし
師氏細の面説ハ紫の上地さ
あさき由へいそけちしと世人

ともどもむさぐらく笑しげやうにしく
めくれすふかりくなすじ八も地用ろ飯とを
のづらしかりらく人地何いとのまたうこし
きれべされすらんいつしめざ御志さつしと
みもわかられいまでその人ともちらくし
どぶやうまのよいらしられなどしも
らんはおそやうま似みくき人わはあく
じ関わかりなじとそとてろすくこ語
そん人とりのめうしまそん人やとらめん
とろつしまちやつる仏なしげよいらけてき
こ我らハなじさふく御人でもこさうしあ
てうしらふもりうらんありとしさうしめ

てうの叢く
そとやしくやとくの 細 葵上
の父やとくのうけさ給ろす
と入道の勅がしめおけく
けよりの前身うりしたとを
孟 勅定 源の初めより思
まだ大臣のしあひかなく
師 源の十二歳の時より大
臣の婿しめしつき給へ
さんうり此てしたりぬ
細 各々の所とも別き御
しきへそてハうきとやく
源よ教訓の御詞く
御ゆかりなりけりとし
孟 源よ給されハうしこま
あらう御料理されて 孟二
同ゑとくりてのと地し
く地わしめとく 師 源
の御合点ちこさうる人と
入道の心と地しくやうめ
とく
こう八思ひろうとうちみ
られて 源八地ふ中の女房
あとしよあへてあらいう

入道の勅定く
していとしくゆゆしくのおひるげなる
おすかしくもおげよ地げなしくらし種をお
御あくりく地しそうなれさまばかりの
ここそとぬおとくはあくしらどおどく
葵上とく
うちまけあすくへすてるすも語んやし乃
源氏の二歳し然大てく
語りそれじくこしまりこうさ御うされ
細 入道のゑく
いろへもこくしおそねなども御ゆかねおすめ
入道の御伺し うイ
つまとさいそおしも地御しめそざうしすき
大きれをへうろこうて
どきんしうこうそ思されくけらゆら女房
孟 まれとこハされとえんく
よかれ又てるすさのへどなじきすぐて
こもやそしイ 何の深
あすしれなじしもこくしきことさめうとさいらむ
ようさうよねさこの方ハえそうそとく
あかりのくら御ようつれおりうそへつくへり

そくれすゝとこえとハ
ねらいこともくし
こねへおふくらん　天子也
どちくめしつかひし女
房之　晩令も蔵人なとも内
裏の従仮もと采女人なと
の女也　細　典侍掌侍八云
ま及ざりし
めでしみやまでもすらう
くらはよめこかなかや
源は何の女とくそまを
でくかれるびぬ八ちこ
と源の殊しらくびせ候
はれやうの女はへぞれむ
つるもうさき　帚木にさ
しもわざめきるれなう
うらつきのまくし恋を
いこのおしくぬれおれやう
うそとまちて云之
がふれしなやしう　孟は
ときり女房はまれ又こゝろ
のんくれしうでおうびと
えしざめうどこえしとまけ

色好ましう[illegible]んとの給ひてこそうどのれ
帝の御年ねびさせ給ひぬれど、かやうのかたには
え過ぐさせ給はず、采女、女蔵人などを
も、かたちこゝろあるをば、ことにもて
はやしおぼしめしたれば、よしある宮づかへ人
多かるころなり。はかなきことをもいひふ
れ給ふには、もてはなるゝこともありがたきに。
めなるゝにやあらん、げにぞあやしう
すい給はぬと、こゝろみにたはぶれ
ことなどきこえかゝりなどするおりあれど、なさけ
なからぬほどにうちいらへて、まことには
みだれ給はぬを、まめやかにさうざう

さうくし　さびしきこと
孟　無品との事也
としいたう老たり
細　源内侍の経之に出之所也
十七八の人也
さくなくり　河　央の字之
けんぐとし百年
の中と云也、五十余也
りりのと也

人のわりさうんは
源の女えそらう
内侍よりの語なる八人の
さてもようしぬるする
ろと思ひつゝうりてつま
なくりておしのつく

しと思ひきこゆる人もあり。年いたう老
たる典侍、人もやむごとなく、心
ばせありて、あてにおぼえ高くはありながら、
いみじうあだめいたる心ざまにて、そなたには
おもからぬあるを、かうさだすぐるまで、など
さしもみだるらんと、いぶかしくおぼえ
給ひければ、たはぶれごといひふれて心
みたまふに、にげなくも思はざりける。あさ
ましとおぼしながら、さすがにかゝるも
をかしうて、物などの給ひてけれど、人のもりきか
んも、ふるめかしきほどなれば、つれなくも
てなし給へるを、女はいとつらしと思へり

うへはうちきの人へ
細 内侍をめしてけふ御髪
まかなひの人は人にまうちきと
着るをいふ 花 藏人
私記第十三云御髪御鬟
事侍臣之間撰堪事之人
供奉例皆着當色袍
謂之御袿深紫色絹也
納藏人取之 今案御こ
すりはびんなどかうの人を
紫のうちきの上衣をきて
袷衣をきて御うちきの
人といふ
こそもかりうつうし
源内侍がさまを見ても年
しなぐらくみゆめくれと
無心まなすつく
かはほり 河 蝙蝠とかいて
扇とつくりたらぬおもて
紗て夏扇の惣名なり
師 かはほりのえならぬをみせ
おことに扇と女の持は執とてく
きんしめく

の御けづりぐしにさぶらひけるを はてにければ
うへはみうちきの人めしていでさせ
給ひぬるほどに又人もなくてこの
内侍つねよりもきよげにやうだいかしらつき
なまめきてさうぞくありさまいとはなやかに
このましげにみゆるを さもふりがたうもと
心づきなくみ給ふものから いかゞおもふらんとさ
すがにすぐしがたくて ものすそをひき
おどろかし給へれば かはほりのえならず ゑが
きたるをさしかくして見かへりたるまみ
いたう見のべたれど まかはいたくくろみ
おちいりていみじうはつれそゝけたり にげなき

まかり落けり 河 眼窪人此似不於死目の皮の白髪
ひきつりてあるを 細 まかはいたくくろみ 師 まなこ
文選云高眶 一説眼皮也 遊仙窟六 眼皮瞤
いみじうはつれそゝけたり
づまりかゝりたるのみなり
扇の下草おいぬれば
細 をりしも森の下草
おいぬれば 不審也 駒もすさめず
かる人もなし 師 源内侍
のとしよりたれど色すき
人もなしと述懐しける
なり
こともあれ
くちをしき心ばへなり
くしおふかもあり
をとこ盃 みなぞかし
杜こそ夏の ひまも
なくしげりにけりな
たのもしき森こそ夏の
かげはよけれ 呼内侍
が身を人もなしと述懐し
よりとぞもあれ涼しく 盃扇
の絵の森の絵をとく
の涼しさをよく

ぬ扇のさまかなと見給ひて わがもち給へる
にさしかへて見給へば あかき紙の
うつるばかり色ふかきに こだかき森の
かたをぬりかくしたり かたつかたに手は
いとさだすぎたれど よしなからず
森の下草おいぬれば などかきすさびたるを
ことしもあれ うたての心ばへやとゑまれ
ながら 森こそ夏のと見ゆめるはとて
なにくれとのたまふも にげなく人や見つけん

老しこそ　花鳥云　花古今わが
しハ助字也
門の一ひらも落りかゝる人
老ゝほとれの駒も　孟
れ男のこゝろそれはよ
めうとゝわり　細　源は御おも
あはれのよし也
ゆうとけへ人や　花　蜻蛉日記
さゝわけは人わきてそきさめ
かくれの駒なつくめる森の
下かけ駒なつくめる八源典
侍のいつとなく男をよせ
うく〳〵よしとなり　細
内侍好色の人なれハ男れ
おくいづれもわりなく紙
ゆくハさびしけハ人のあふさき
となり
細　源氏のやう

とくるしきを女ハさも思ひたらず
君しこば手なれの駒にかりかはん
さかりすぎたる下葉なりとも・といふさまこよなう
色めきたり
さゝわけば人やとがめんいつとなく駒な
つくめる森のこがくれわづらはしさにとてたち
給ふをひかへて・まだかゝるものをこ
そ思ひ侍らね・今さらなる身のはぢに
なむとてなくさまいといみじ・いまきこえ
ん思ひながらぞやとてひきはなちて
いで給ふを・せめておよびて・はしばしら
とうらみかくるを・上ハ御ゆするはてゝ・みさうじ

よりのぞかせ給ひけり・につかはしからぬあ
はひかなと・いとをかしうおぼされて
すき〳〵しき心なしとつねにもてなやむめるを
さはいへどすぐさゞりけるはとて・わらはせ
給へば・内侍はなままばゆけれど・にくからぬ
人ゆへは・ぬれぎぬをだにきまほしがる
たぐひもあなればにや・いたうもあらがひきこえさせず
人々も思ひのほかなることかなとあつかふ
めるを・頭中将きゝつけて・いたらぬくまなき心にて
まだおもひよらざりけるよとおもふに

このむすめ 細 心を湯より 孟 好
色のみへ内侍の好色をとらえ
さぞ
あつまるさんのあそくさあら
孟 此中将の源内侍へそふ
思ひかけぬのつまなるさ人
と六条の御ゆかりによなな
むかへてし内侍のかつく
みえかりしさハりともり
細 九おもよ事にて此内侍ても
かのゆへよとまうしわれ
孟 かつうようぢゃうへハ人おか
すくさみりかくさとし
ふかすられて こうよふく
つは源にまひつきらく
師 中将もて敷きんとハ此へた
実は逢まゐらせハ源り
えそ源ならおおもハろ死
とまやとまみ此し
うんめいてん 河 温明殿
花中の重の東の方にあり
殿よつく内侍所のまし海
ともあかり

つきをめ好み(この)こころもことまかりしかば、はなくれ、
(内侍ま此中将ことりまひしく)からひつてよそり、此君も人かりハいと
ことなる戯れのつまにかるさ人のれたすくさめよ
とゆりひつれど、みまかりしをほうざりあり
(孟 双ヲ化之)なとするわざもそのこれとや、かうろあのまで
(細 源とうら此中将の中心え 師 内侍の)源氏の君へえまり給ふ、ふけさうして
(まけのく)まがらことゆかどもひの種いともし
(源のく)それハまさくさめんとお湯をとうあそぬ抱う
(自由なる内のあまく)
(ままふ子の地をさまし)まませ、さるひとへさうきりよまりをゆるすほし
てあずかり源しさ宥のすうれようめいでん
(源氏のく)のわかりどもぐすまあらきまへハ此内侍
(琵琶く)ひき給ひしゆりうひさるより(山門のおすへく)

りのくくめし言しりう
れらひとあられよまさこゆ
古今序に 逸者其声楽 愁者
其吟悲とゆうむよう見
るしや
うらうらにておりやさるほ
細 催馬楽山城のうたに
絹くずまよ思ふくられ
くまかせんの詞をとられ
河 山城のこまのまさうの
うらくてあるやらい
まや、たけ伊ししるや、此方よ
せんく破れいくり世
やさるまりし 宇利多門来
天仁也良此しるや 宇利
なるまでこ 催馬楽 花山
昌山城
識のこ面のまさうのうらつ
らうすろひてほのぞ名し
くりかう 師 山城の寺をと
あくしめうあくしあらひて
のらぞとゆうこてうるあり
くおいるまこゐんむし此人も
河 武車定家への本よハぐくたまへ
うとあり。親行本よハ文君

うそもゆらこ京のれあそびよまどはまたどの
してこよまさうひとりまさごとほすれハいの
らうめしう菜てまうおかりしいとあそれは
きこあうり津くらりよ、あやしなまし、と(かき)
いいておうしうてうふぞ、むそうしかつきさきさ
(源ろハ老てはこのるれハと)
(鄂州へ文集第十よあるうく)くじうまありきん菁の人もうくやれう
しうそんとみてゆまりて、そてあふひきさや
(源氏かうきまへうさんとのあふみこうひきて)うそいでいてく携りひきでれさうけさひきすら、
まおはりかやを岳ひやうふうすひてぞうり
(細 二帖の御く所源まとゆうさみをせとえ)ぬまつるよ、そうしうとうてこくまうをとこしら
そへさかを倒りしきなハさうふちうぞ
もと海

かどかどしくひろへひとしの人をとあり。或説にいはく。琵琶之各可随所好劉列事　白氏文集第十

夜聞歌者宿鸚鵡洲　夜泊鸚鵡洲江秋月澄徹隣船有歌者発調堪愁絶歌罷継以泣泣

声通復咽尋声見其人有婦顔如雪独倚帆檣立娉婷十七八夜涙似真珠双双堕明

月借問誰家婦歌泣何凄切一問一霑襟低眉終不語　師太　鸚鵡列は鸚列の内にあり

河　如此事　史記云卓王孫有女文君新寡好音　太　暴之　業之劉列　楽天の詞と文にいひ

源内侍をさしていへり。花しくして山城の守とうちひとさを劉列しそ

しらへかく如何　花　此文君を主家への年には劉列にありあんしの人々とあり。河海に

或説とおされあるいは劉列は琵琶物語のおもてにしてよきにしらせしれらかららへいかさとふみと

源氏の立ありふは劉列の女のうらふを楽天の詩によりはにかよひたれど彼劉列の女は十七八の

ちかとるすり。源内侍はさまざまさらまさへ齢也頗るすぐへらく作りかやこれはよりて愚意

は八文君花とまうあのて。此ふくろ。まさ卓文君年ころりて司馬相如にあまそめたれて

白状吟と云詩とつくりけり。相如是をとりてあれてもれはもかやや。源内侍のまま若も年まれ

て人のうちて。まさかさまにありしにより物語の作者文君を引たせたるかるべし　桑　花

鳥云同し　細　花鳥には河海の説いろしとあり。但愚意はかく思ふくあり。可然し

秋聞鞍者宿劉列待と花鳥は娉婷十七八と見ゆ。此句はうとやく合せりいはあかうしき。弄

主死年はかくらんらん　此釈はうふ　抱をよまく　当住かくらく思ふるへしむらくも

あけずやをかのびかやは　細　催馬楽そのうわらぬのらく　河　東屋此あまりの歌を　此

とれちぬれぬこのみとひと　二段　もてうつひもとくもありあらはそその女をれさくめさし

知らくとあせうまれやんはまは　催馬楽　細　例式の女はへらうひるさこし　孟　女の方よりそれすぞてはな

例はしらひらうてらかすか　例はうひるとし

さそぞならす事あれ例はうひるとく

立ゆうしくおまあるし　内侍あく　立ゆかしくへきとしわらじわ何さやようさ　花うえ轉之

あてされをむひて立あらく人もわくしと。みえそくきは

ちくて高もかりしらく。源のこのそ人とらちろ世とのおふとも

あるしとはおりもしとくうらへ

ら八ちいるよたかし去聲之人つまは　細　人妻たれを源

かたちをふうじと思とく給理なそへの通つとく思も催

るまのあけまやの詞よりよ。やんまとおうきを侍あり。

まやと八平の屋くおまりと八扇くそのきしふもうろ

さあふもかれどとく　晩餘

やんつましと云詞よたいり　細　あり阿あまやと八四阿

とおまやと八両下とさく

れすくて

源のらへいはつれなくぬ冬の

わうきやうすし東へと

なり

てもうら。あぐそくれられどとかたげくと。秋

細　秋ヲ独ソテハあつまりてと源の思ひし

知ろりしとしてさく。地ふまじまれびくらし御　内侍かたみと源

氏の哭しく地源主之

しや。何ずまとうくまでそくと地源

源

人つまはあるまじっしいあいやのむまや

細　なましきと。さらは

のあまりもかれしとそとつふそぞらあ見

くにひままく

あま間なれどおありもとしうるすくやしもひ

細　むかひはちとうへなを先　孟　あれくは心をるすくの様く

つへして。人はまてるへはやつまうわかう

とくあれじとあとしひかりて。思と。あめでと　細　これは定まりうて

面白く思給く

きらちぞまず歌中ねん式ぶのいとくすめ　細　文法ざそなきお給をふよく　うたうも

以中務の女君を源のいきあまかく　をる

どちらそくしてつねよりどらへ御なうさ　奴の

ま我つまたくしてうらくよ思ひまからこく　正の

物かあうとなぞと侍しれへとのかこもひ

これをこそけうあるらら
孟 源の実因をまもり
まことにいとうれしとは
中将思ふ心
こりぬやと　源を也
まてこりぬやといはんと也
みえぬらんやといふ心を
くるしめてこまかにいふ也 孟と
もせよ之 河 頭中将の
尺続るうしろ修理大夫をそ
源氏のねびたるをまち
あらそし
すゝかしと
此内侍を忘かねて せしと 細 修理大夫之
と思ふとく 師 内侍の事
なるべし
ゆるくある人 修理大夫
源氏の秘のようろく
くものふるまひ 河 衣通姫
わがせこがくべきよひなりさゝがにの
くものふるまひかねてしるしも
てもしも 細 此人の来る

まことにこれをこそけうあることゝうれし
かゝるおりにすこしおどしきこえて御こゝろ
まどはしてこりぬやといはんと思ひてたゆ
めきこゆ風ひやゝかにうちふきてやゝふけ
ゆく程にすこしまどろむにやとみゆるけしき
なればやをらいりくるに君はとけてしも
ねられ給はぬこゝろなればふときゝつけて此中将
とはおもひよらず猶忘がたくすなる修理
のかみにこそあらめと思すにおとな
おとなしき人にかくにげなきふるまひをして
つゝまれんことははづかしければあなわづら
はしいでなんよくものふるまひはしるかりつ
らんものを心うくすかし給ひけるよとてなほ
しばかりをとりて屏風のうしろに入給ひぬ中
将をかしきをねんじてひきたてまつる屏風
のもとによりてごほごほとたゝみよせて
おどろおどろしくさはがすに内侍はねびたれど
いたくよしばみなよびたる人のさきざきも
かやうにて心うごかすおりおりありければなら
ひていみじく心あはたゞしきにも
この君をいかにしなしきこえぬるかと
わびしさにふるふふるふつとひかへたりた
れと知られで出なばやと思せどしど
けなきすがたにてかうぶりなどうちゆ

ごほごほと 屏風をたゝむ音なり
いたくよしばみなよびたる人
風流はなよびたる人なれ
ばさるくこゝろよりふる
人なれて前にもかゝる
ことのありしになれたる
人なれとなり

おこなふべし
孟浪鳴呼所見ゆるしる
らんとし
ほどなく 孟殆也
師やうくたゞしき人之中
ねんと筆に記しけるまゝ
このましうわかやぎて
内侍の主従ぬえよふあり
こゝやぶそて身をとりく
あしろうべし…まご
風俗みもありぬれて
くらしあて拙者ひとり
内侍のうらほくろひ
をなくうらとあて居ル
ほどよ中ねよ地ごされて
あひまうひし主従なき
ゐのかしそしハをなしら

ゆゑめでたしまことにふしろでござるはいて
おこなふべしと覚しやまとふ中ねいう
すゑげて地ごさんとあへ
じ我ともうしれこさしくと思てりのこと
いはんぞうつうゝ いへる言文よりそ
なしてじまうを引めけれど女あがこゝろく
とゆうひてゆとすうよほどくわらひ
めぐしこのましうまやさぞりそなし
さうろうべしそさをおりまれ又十七八
のへんらうしけて拙者ひとりまうひえ
すらぬ二十のうら人さられ中にて拙
とうしうらいとつらすうらめさ
ゐよりそひがめそゆゑうしけなくれ

ゆこそりたるりぬ
河鳴呼花ちくらくなる
之師るかしくなるぞ
えるで 者は中ねゆかし
きをわんじてとおうそ
れとうあてうらや堪無
あるぞてし
ゆきとほう…よ
孟真実現心ことく
万事すうおうらくこも
まれハらしまうらうそ
ほ事しゅうれハ師源乃
中ねの太刀をとりきて非ず在
しまわまうらよ地ごりての詞
さらつ…あくしや
孟おりわりとなるぐそう
きこえればさぞもれれかくき
まですぞ
ぞなめなよしまんと
為よあそしがりを…り
て辟風のうろよりあぬ

とこそあれど、ゆくてうくうけあそ我と志り
てしさらまりすうわらりもりとちくにろり
ぬ、その人のありところまふよびておうしけれど
うらめさそくひき人ものへてびていろきうろ
うつこまへ出でゞおそまりのうしこえる人で
らひぬ、まそしとはほくしゞふうらまよ、やうを
みしゃいぞこのうそしこさんとのへと
つとうんてざうよゆうらうさそとほさう
ばかりのみ色にてそとて中ねの為をとひき
とうそでめるをおへべ、めでじとこもとへとそう
くひきしろよ線よおそろひて、ほどろくと
さしぬ、中ね

とおりもさむゐさき夜
なれはまげぬとしきん
とのあやく 細 源の此歌のひゞき
つゝむめる
もあらはれんこともしく 師抄
ほころぶ中の衣といふより
むかしもそれんとまくく
らんはとうまるは源なるらん
細 此歌のこゝろは衣の下にさまれ
上はうつくしきのこるなりと上
ほころびあるをいふと
よそにもうき名はかくれあら
まじきとなり
へられなきものとしるく
細 名はかくれなきものゝ流
とぞ思ひとるぺきなる
どうしてもいきくと後撰之
師 源のたのひとへども哀を
と此のよみのひとゝとなる
てさやうに隠しつゝきて衣
とおもふたゝよりくさきて源
を思ふも はあさきむすめ
とく夜衣は薄き心の疎はく

つゝむめる名やもりいでんひきかへし
ほころぶる中のころもにうへはとりきぬ
しるかりんとおぼす
源 かくれなき物としるしる夏衣
きたるをうすき心とぞみる 地 といひかはして
うらやみなきしどけなすがたにひきなされて
みな出給ひぬ 源氏の心 君はいとくちおしく
みつけられぬること とおもひてふし給へり
内侍はあさましくおぼえければ おちとまれる御さしぬき
おびなど つとめてたてまつれり
内侍 うらみてもいふかひぞなきたちかさね
ひきてかへりしなみのなごりに
そこもあらはに

うらやむへきものなさき所のちかくより
源氏も此事も女よりの方より
らくそても 消えうよ云々
そこもわりなき 細 別ての後を思ひ
おもひみのさがやとやうの
河 金葉 細 両つまなる
と此かくそく
わりなし 細 此中将をさも
うらむへきするとよく
明経なるせうん後は此の志
はまつとわり今業あ
らうらし後は此の志れ事
さうせりん後とは源内侍
のなるらへし連く歌
とくやせし故文今も
此の心のあかとし
師 今あの哥を思へし
第八中将の 細 第八重衣の
それと思ふ 源のよりは
中将のかの源氏の花宴三
源氏は宰相中将と云侍
此時はいまだ三位中将之末
にて宰相也よりなりし
みゆる 花 軌 直衣 人 昔

とあり おもなのさまやとみ給ふもにく
けれど わりなしとおもへりしもさすがにて
源 あらだちし浪に心はさわがねど
よせけんいそをいかゞうらみぬ
とのみなんありける おびは中将の
なりけり わが御なをしよりはいろ
ふかしとみ給ふに はた袖もなかりけり
あやしのことどもや おりたちてみだるゝ人は
むべをこがましき事もおほからんと
いとゞ御心をさめられ給ふ 中将とのゐ所より
これまづとぢつけさせ給へとて おしつゝみて

ハ当家のこれを帯に用ひらるゝにこその世も主上の御帯ハ源引きるもし紋されを褻衣の
表衣ハ二藍或花田を奉ることにて其もし源氏も宰相中将もを召しこれぞの色なり
次中将ハ年ハまだうけれど官ひきゝによりて二藍の表衣ざらに奉るへし官の
さうしさへ宿徳の人など用ゐる官のひきゝハ白きをひく柳の色に源氏の帯
なすもしこれらひなきもひのとわりにて次中将ハこゝに二藍なれハわかれるをしよりハ交ふる
こしと云ふ〳〵

さゝ袖 孟 鰭袖 端袖 云云 細 鰭袖也或説にはさハ鰭く将の字又不用之 抄 源の出せ
衣の袖ちぎされてなりけしなり
将りしらて 身をぬぎなほしらう人へこしむべく

中将へ 細 催馬楽の石河を引く説ハ花田ならねと
（以下注釈略）

とておしつゝみておこせたるをいかでとりつらんと心や
ましく。この帯をえざらましかばとおぼす。
その色のかみにつゝみて
中絶えばかことやおふとあやふさに
はなだの帯をとりてだに見ずとてやり給ふ。立かへり
君にかくひきとられぬる帯なれば
かくて絶えぬる中とかこたん えのがれさせ給はじとあり

わり。但むかしの帯ハ二藍なれ花田の帯と乃ことみえ今の中将の帯の色も
（以下注釈略）

日たけておのゝ殿上にまいり給へり。いと
しづやかに物とをきさましておはするに
頭の君もいとおかしけれど公事
おほく奏しくだす日にていとうるは
しくすくよかなるを見るもかたみにほゝ
ゑまる。人まにさしよりてものかくし
ハこりぬらんかしとていとねたげなるしりめなり。
などてかさしもあらん。立ながらかへり
けん人こそいとおしけれ。まことはうしや世中

―と一の山　花鳥にこのとく
わらたかるや川いまし
うらんくるとのみのかしる
人の同と吉字にねうりを
貴てしうらき名かしれ字
くいゆるハ口うるあゆるを
うくときわれハゆしくてこれ
何そゆ附ゆ八蓑の三まゆ
給のうういらんと源とたと
そとまねよを人とのゆとく
殿人とゝなとそあとうし
孟源の兄弟の歎きなち
ぶれとケり

うといひあらせて、たゞこの山おろしやまとうる
こまかなるうむさしてそ給ハいとゝもゝれけれ
このつぎでことよりひむりのかさるひ
ケうはいとし給ひつらし、人も（は）と見かりまる
らうへし。ふくかはいとえんなる御（こ）うう
まゐし　とゆりひありさ給ふ中納言ハいり
のえうよをゆのといそぞうくうさうへの
とゞしうきよをんとゝゆりひそう。やむてと
かきされけしくのみてしらせまうへのは
りてなしのこてよかまうれはそゝかりて
いとうしよまりろてしあへるとこの中納言ハ
さうしくもしはれまいしらさせしらる

（傍注）
細いるをこたし給ふ
御給のうすと云て立しもひて
源氏ぞ
内侍之
細 葵上之
細 葵上より以下
源氏之
細 源との宿ぞハ
内侍之
うらうくてうんと云まて
源とは寵をもちあれいさ
そうき御先此中納言ハいもあときく
何ものきとく

みるもの御子ぞとえそうり
源氏を皇子と之げりり
しそわれ、源中納言も大臣の
中にて八物がたしことケうに
其上人家のそらしうそう
しうれてそたらまへを
源ふもさのうや物しとお
うしりや何ゆすもりとを
給と某の浪よりいそり
七月よそし台　河左傳云ワ
帝嫡妃曰皇后　後漢書曰
以循内職為后　六下界
細　后つくの女御中宮よ
立給ゆうや也　河内十二月と
立七月丁給及そのゆへハ皇
太后宮藤温子昭宣公の
むすめし　寛平九年七
月中宮よ立給ふ　昌泰二
年七月皇太后さうぼま
に撰して云何うなりし
給ふ七月丁給く　兼門
みるものかうねさせ
細天文八五於九於禁中一撰之
以以後不ヲ二録之

しもまそのてと、ものいひとくしてうし、給ふ氏
あやうりそ桃君のは、ひとかひつらむる
みとしの御とをかたらりまとそあれ我も
あれどこの后とそてあれどは物ぐゝとかう
ぞみてぞとしるゆくうくうくつれさうは
何ぞうりとはうべさちゝとお給くかのかね
かなへしくへうもものへとさうそりとくの
ひく。何事もわかしたるてくしうくひてぞ
あの給をうこのは中ともの御いでつへてとあ
やしうなしうさられどうるくてみえ七月
までさこそれおすふめうつし源氏ハ宰相
またり給おみどおりねさせ給へるへの御

（傍注）
源中納言大家の腹之　葵上之
源と源中納言とさのみたりくと位とも源中納言ハ四位之
何程か源氏の中らんと見たるとき
孟　源中納言る
孟　某の事を誦之師　云わし世うとく
細　是より源氏宰相のすゑく
兄

源氏の御弟や御子ともおもふ
河 わか文 冷泉院の御外舅
親王達までも人臣までもこぞり
しるべき人なりと云云
源氏執政況太臣継有例況・
師 うらやませて八摂政八致
氏なるべし そも
まてんいふく こさ人
致仕の羅竜と姫このまゝ
いふくとく
されど東宮の御世ちかく成
ければことひるさき位に
とめりしのとめうしそ
御のしさせ給ひけり
細 此段は桐壺東宮にして講(?)人の
御暑之く 師 薮(?)を后とす
またを御位に〈ゝすもしのあ〉
されど朱雀院の御代ちかつき
かれはこきひわくこと殿八
皇太后になりまいらせよと
けりまた東宮の 弘徽殿御なう
こときあふとまをとさせてけ
るといへり
細 冷泉院之 君

公づかひちかう御ゆるく。式部卿宮とゆづりまうし給ひ
〈細 右大臣の御娘の御文冷泉院之 師 東宮〉
〈諸事と判りめぐらして〉
さうてしよ世給はれはうしろて志給ふべきことひと
おほやけれぬくうこそこれとこらさて。
〈共アノやかとく〉
源氏の内府やけどしちり給をとらすしねは、
〈内大臣と成りて摂政しまいらせ給ふべき云〉
もく文めそもいよふごさせのこさを悔はこあとさき
〈后の契り位すしてとく〉
まりて。院まりまいし給ひそよにたりん御ゐかりあ。
〈東宮のうしろこれてあく〉
こきでんいてくれこうつうち給いてつり
〈位くらく改判すく〉〈蕈子訛く〉
なりされど東宮の御世いてしらくたりぬ
〈太子朱雀院の代とのあかく〉
まだもひたまされ位なりぬ御ほじの
どあうとそさてしさせあひたちげしまた
〈師 天子よ位へ奉ふ年数之〉〈蕈子訛之〉
文の御母みく女余年よなりまつる女院
〈わうご〉
ど思しそしりてはじいつしてもまつり給
〈冷泉院とく〉

孟 そらめまうりとしもく
ノ 師説 細の御役用也ア
御うしのうちとおもひゐられ
花 中宮の行啓よ八鳳輦
にめさるゝもわり文
麟のいと御車にのり給
〈ぎゃうけい〉
行啓あつて俄なの人
乃から乗るもまゐりより
てうかるゝ給ふく
河 い世物語二条の后始まづ
東宮の御息所とやまをす
時武帝はまつちく給げ
〈ニノエ〉
あたり近来つくさはさふ
らひ給ふおわすぬ女房や
をくわのやまをも位ゐそ
八朝代のまゝも浮りひい
でくわとて公は八人の
とや思けんいふくおもひ
さんありくれうし 師うく
まつり
つるすせ殿 師 藤壺と雲
おもくなびあくはなり
まつけても冷泉の御やうと
せうりしととく

ひがごとなりしと。例のやうにかゝれ
〈細 こうきでんとおほしところそ〉
〈細 中宮之入内之〉
〈うき人の御まよく〉
世人もまうして作りまつり給御のれとしあふ
〈云しまう〉〈源氏之〉〈孟 供奉しまふく〉〈新花院〉
牽桐の君もつかうまつりあふ。おなじうさ
記ところゆう中みもさいでうのみこ公
〈冷泉院のひろうそひてく〉
のひらうやうそよくひたまされ御おくよ
さへりのしまうへそ。人もいとことよおもひし
〈細 源氏 師 薮よ御公のうくれ八く〉
づなううてもはまじてありなるされ公みは
わらしのうちを思ひ御ふれていとゝふびさうび
〈細 忍立ぐうとゆりうふ之 孟 ふおうゐ之〉
なまさにらし給よ。そさろえうら光ゆゑでえう
〈源 細 忍の字は八日ゟ宮ゝ雲井まで人をは八薮つめ〉
つるもまぬ公のやうこゝろこれ雲あま
人をこうにつけてもおものとるいわりごてとれ
〈冷泉院之〉
ていのいとあそれたまり。みつえん按よとらけ

廿二終

思いと〳〵けなと
在つかの流へ　細 此哀の
御ゆへるゆるまく
あまいはうあ海に　源の容貌
よきさきの御顔有れがいは
に似りかて源よどとう
ぬなうらあり海ふ女の
えんそし
月日のひかり　細　是も源
に似きふるを云　保源
氏と冷泉院との御あり
さ海を月と日の光の比
ほそらうそし御にひさ
ち炒くまはへかふへきと
し

まふ月日にあつかひて　いとこよなうてしまゆつり　源と見奉るかたちとも
ことさうけなりと思ひところうしと紅顔と
ど世ひなき人かとみなありうしげなりいは　西霊堪え
さ海よつくりて見はとおもぬれありさ海
いよ〳〵その給ふまし月日のひかり
のきよしひとふかうすかへ人これ
も哉